

第4図 調査地と周辺の主な遺跡(1/25,000)

【まとめ】

今回の調査で確認した古墳時代前期の流路は、縄文～弥生時代の自然流路の一部を加工して、導水施設を構築したもので、水辺の祭祀が行われていたと考えられます。また古墳時代後期の溝は、同じ場所に人工水路を掘削し、飛鳥・奈良時代を通して維持・管理されていました。溝は、周辺の耕作地などに水を供給する灌漑のための水路であった可能性があります。

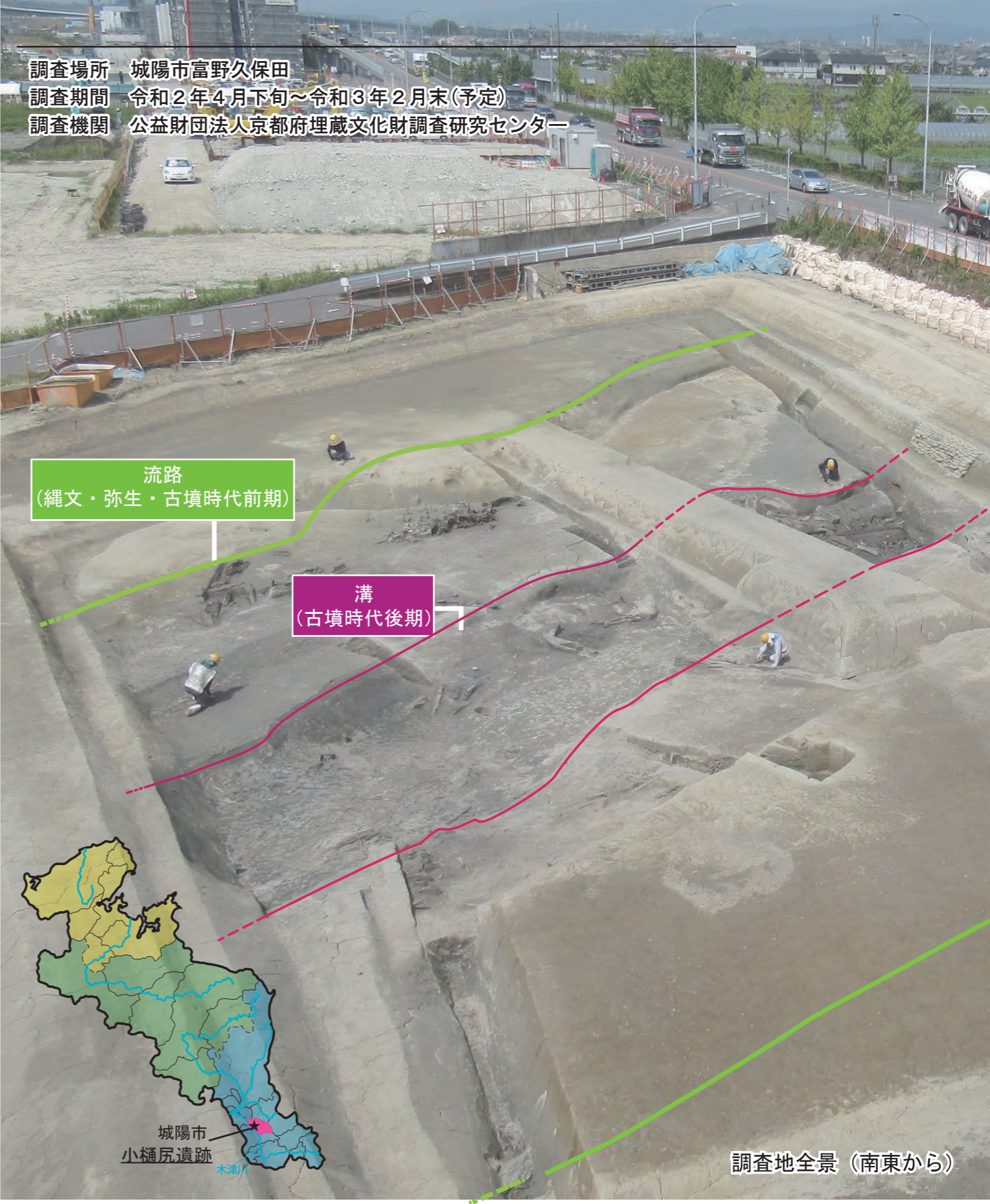
小樋尻遺跡が立地する宇治丘陵の西部は古代に「栗隈」と呼ばれていた地域ですが、『日本書紀』には仁徳朝や推古朝に栗隈の地に大溝が掘られた(田が潤った)と記されています。この地域では、古墳時代前期に造営がはじまる久津川古墳群や、居館とされる方形区画が見つかった森山遺跡、さらに飛鳥奈良時代の久世郡衙と推定される正道官衙遺跡があり、各時代に有力な地域勢力が存在しました。

今回確認された流路や溝は、地域の首長層によって、灌漑施設の整備を始めとする大規模な開発が行われたことを示す貴重な資料と言えるでしょう。

旧石器時代		
縄文時代	草創期	
	早期	
	前期	横道遺跡
	中期	
	後期	森山遺跡 水主神社東遺跡 下水主遺跡
	晩期	
弥生時代		下水主遺跡 芝ヶ原古墳 森山遺跡
古墳時代		久津川車塚古墳 芭蕉塚古墳
飛鳥時代		
奈良時代		正道官衙遺跡 久世廃寺 平川廃寺
平安時代		

こひじり 小樋尻遺跡 第10・11次調査

調査場所 城陽市富野久保田
調査期間 令和2年4月下旬～令和3年2月末(予定)
調査機関 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター



流路
(縄文・弥生・古墳時代前期)

溝
(古墳時代後期)



調査地全景(南東から)

【はじめに】

ちゅうせき

小樋尻遺跡は、木津川右岸に形成された沖積平野に位置します。

平成29年度から新名神高速道路整備事業及び国道24号寺田拡幅事業に伴い、発掘調査を行ってきました。これまでの発掘調査では、縄文時代晩期の竪穴建物や、弥生時代から古墳時代の間造られた小規模な溝、古墳時代前期の溝・竪穴建物、奈良時代の掘立柱建物、中世の島畑などが見つかりました。

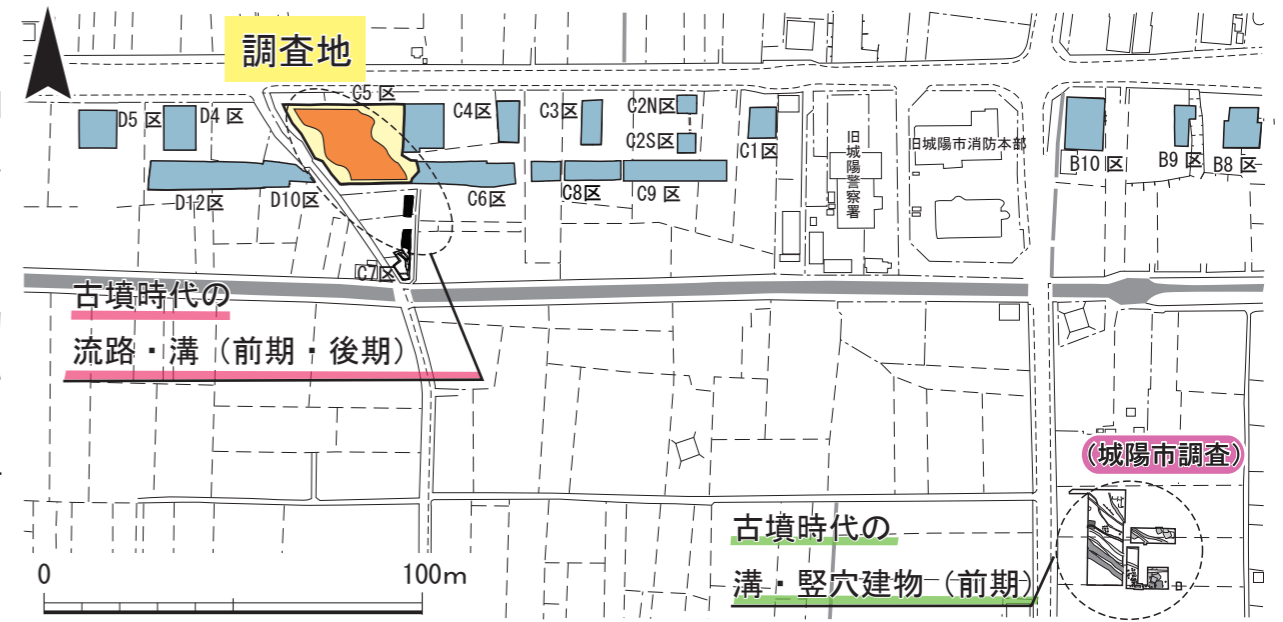
【調査の概要】

今回の調査では、おもに古墳時代前期前葉の自然流路NR2と、古墳時代後期後葉に掘られ、奈良時代まで使われた人工的な溝SD1を検出しました。自然流路NR2と溝SD1は重複しており、同じ場所で異なる時期に改修をしながら使われていたことがわかりました。自然流路NR2の下層には、縄文・弥生時代の流路の一部を確認しました。

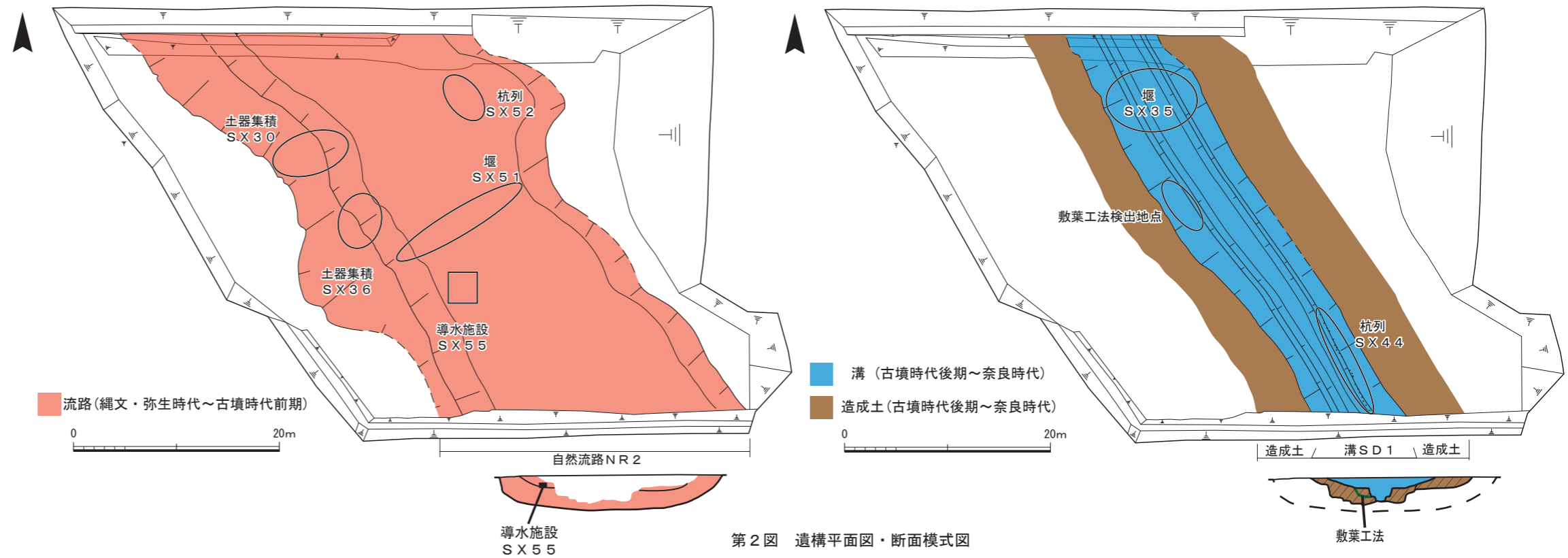
自然流路NR2は、幅約25m、深さ約2.7mの規模で、縄文・弥生時代の流路に一部手を加えたものです。内部から、木材を杭で固定し水流を調整する施設SX51と、導水施設SX55を検出しました。導水施設は堰板で水を止め、上澄みの浄水を木樋に流し、祭祀を執り行っていたと考えられます。また、流路内部から、鍬、鋤などの木製農具や数多くの土器とともに、漆塗りの盾や琴などの木製品や勾玉などが出土しました。

溝SD1は、自然流路NR2が埋没した後に、あらたに掘削されていることがわかりました。幅約11m、深さ約1.8mの規模で、溝の底部両側は造成され、造成土の下層には、敷葉工法とよばれる草本類を敷き造成土を強化した高度な土木技術が用いられていました。また、溝北側では、木材を溝に直交して設置した堰SX35を検出し、これによって水位を調整したものと考えられます。

さらに、溝は複数回にわたり再掘削が行われ、古墳時代後期から奈良時代にかけて使われていたことがわかりました。奈良時代の堆積層からは、祭祀に関する木製品として斎串と人形が出土しました。



第1図 調査地位置図



第2図 遺構平面図・断面模式図



溝SD1 堰SX35 (北から)



溝SD1 敷葉工法 (南西から)



自然流路NR2 導水施設 (北から)



自然流路NR2 盾出土状況 (南西から)